

悪性感冒：病人は成るべく別の部屋へ
H2OFluReport

Foreword (Cont.)

Note: This paper mainly consists of the results from research activities conducted up to March 2009.

However, just before publication, the so-called “swine flu” broke out from Mexico in April 2009.

This outbreak lasted throughout 2009 as a pandemic.

Therefore, it was deemed necessary to include the swine flu pandemic in this report, in the form of a description of activities and operations for quarantine in international airports.

The publication of this report was delayed for the above reason.

Consequently, some of the results may also be included in the 2009 Report.

3. 平成 21 年度活動概要説明

はじめに 研究主任者 原口義座

本研究も2年目に入った。

この間、若干大げさにいえば、世界史に残る、あるいは残らざるを得ないともいえるかもしれないが、皆さんご存じのとおり大きな出来事H1N1亜型インフルエンザパンデミックが発生した。

今回の報告書では、主に後半に加えた付録の項で、関連して活動した内容の一部であるが、あるていど詳細に提示し、これからを考える上でとりあえずの参考資料となればと考えている。

本筋から離れるとはいえ、余計なことかもしれないが、パンデミック発生と期を同じくしてなされた政権交代もいろいろな意味で科学研究に関して、そして本研究にも、影響・関連を伴ってきていることも確かであろう。

すなわち、政治的側面だけでなく、当方が従来より大きな問題であると指摘してきていることともつながる問題であるが、ベースとなる人間社会・医療に関して考え方・姿勢・思想・倫理面・方向性に関しても大きな要素となってきたといえる。

簡単に言及すると、例えば当方の専門領域の一つである、災害医療を振り返っても、これまでのその金科玉条は、

1. 最大多数の最大幸福、といえ、誰も反対しない、また
2. 人間の命は地球より重い（これはどちらかというとマスメディア好みであり、医療従事者・中でも医者は、本音ではそう思っていない、都合で使うことはあるとしても）

であったし、今でもそうであることには、異論が少ないであろう。

しかし、「最大多数の最大幸福」という言葉(?)をしっかりと見つめなおした専門家(と称する人)は余りいないと考えられるので、ここで少し私なりの考えを示し、諸先生方からのご意見をいただきたい。

「最大多数の最大幸福」とは簡単にいうと、ご存じの「ベンサム・ミルの功利主義: Utilitarianism」と考えられている。

これは大変魅力的であるが、同時に大きな問題もある。

紙面の都合で、その詳細は省くが、基本的には、大きく

- ・「功利主義論」自体の抱える問題

と、

- ・この応用・実用（これも英語に直すとutilityという言葉になるので、同じ語源と思われるが）上の問題点である。

後者を、その一、二だけ挙げると、「トリアージ」に関して、具体的な問題があるろうし、また「災害弱者（これは本研究でも取り扱っている重要なテーマでもあるが）の優先順位・位置づけをどう考えるか」など大問題である。

前者に関する批判的見解としてJ.Rawlsらの「Maximin Principle(s)」なども指摘されている。

平成22年6月時点での菅直人総理大臣の「最小不幸の社会へ向けて」というキャ

タッチフレーズは、上記の両面を想定していると考えられるが、諸先生方はいかがお考えでしょうか？

またこれらを政治家の発言を参考に、若干修正させていただくと、

- ・「蟻の目、すなわち、分析的、あるいは超専門的学問の視点」

と

- ・「鷹の目：俯瞰図・鳥瞰図、高い・広い・長期的視点」

というように分けて考えるべきである、目先の利益・目立つようにすることを重視することの問題も常々伝えてきたつもりである。

まだ、そんな議論をしている最中に、舌の根の乾かぬうちにともいえるかもしれないが、口蹄疫問題が発生するなど、本研究の研究内容とも関連するできごとが頻発してきている。

これらに関連する当方の活動資料も巻末に加えたいと考えている。

別紙3
研究報告書

厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)
(総括・分担)研究報告書

新型インフルエンザの大流行に備えた訓練に関する研究

研究代表者 原口義座 国立病院機構災害医療センター 病態蘇生研究室長兼外科医長

研究要旨 平成 20 年度より開始していた本研究成果を平成 21 年 4 月より発生した H1N1 Pandemic の観点からその意義・効果および問題点、課題を見直した。その結果、平成 20 年度の研究でも一定程度の効果が得られたと考えられた。しかし、将来を見据えると、更に強毒型のインフルエンザ亜型の発生や新型インフルエンザ以外のパンデミック・バイオテロも想定した更なる研究の必要性が洗い出された。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

| | |
|--------------------|------------------|
| 大日康史 国立感染症研究所主任研究員 | 山本保博 東京臨海病院 病院長 |
| 白井淳資 東京農工大学教授 | 角田隆文 都立荏原病院 部長 |
| 友保洋三 白鬚橋病院 部長 | 渡邊千之 自衛隊中央病院 病院長 |
| 川田諭一 古河保健所 所長 | 星野正巳 至聖病院 部長 |
| 古閑比斗志 横浜検疫所 課長 | 酒井基広 東京女子医大 主任 |

A. 研究目的

基本目的としては、まず新型インフルエンザに焦点をあて、パンデミックを想定した医療を研究する。

その中心となる幾つかの項目の内でも実際面からみて中核を占めるものとしての適切は訓練の在り方を提示することを大目的としたものである。

特に平成21年度に発生したH1N1亜型インフルエンザパンデミックを踏まえて、これまでの研究の成果と、課題、これからの在り方を具体的な研究目標とした。

B. 研究方法

本研究を効果的なものとするには、専門的な視点に加え、総合的な観点の両面からアプローチする必要がある。

そのような視点から、多面的に研究を組み立てた。以下に示す。

施設関係の面からは以下のごとく考えた。

- ① 専門的、臨床的要素:感染症指定施設としての取組
- ② 医療施設全般、特に一般病院、診療所、などの取組
- ③ 医療施設との連携システム、公的機関・保健所・検疫所等
- ④ 医療施設と密接な関連のあるライフライン関係
- ⑤ パンデミック時に感染拡大、ひいては感染防護につながる交通関係企業・大企業・集客産業等の大企業
- ⑥ 教育部門・施設など

すなわち、医療のみならず、パンデミック発生時に巻き込まれる全ての分野からの総力戦としての位置づけの元感染症との戦いとしての訓練・マニュアルに代表される指示・指揮系統の整備を行い、効果的な訓練方法の確立へ努める。

倫理面への配慮) 特記すべきこと 特になし

C. 研究結果

以下のごとく、多面的な対応を行った。

- ・啓蒙:セミナー・シンポジウム
- ・マニュアル/指導書の作成
- ・一般人・学生・中小企業教育用
- ・公的機関等との机上シミュレーションによる意見交換により課題を抽出
- ・対応の組み立てのシェーマ化

などなどである。これらを詳述する。

1. 啓蒙:セミナー・シンポジウム
繰り返し行った。特に平成21年10月筑波で施行したシンポジウムは、一般開業医・診療所等の対応を主に対象としたものとした。

対応医療知識/技術普及を一般開業医、医療関係者・諸企業危機管理担当者

2. マニュアル/指導書の作成
特に医療従事者用に、訓練を想定したものとし、机上シミュレーション等の検討結果を、動画を添付したものとして作成し配布した

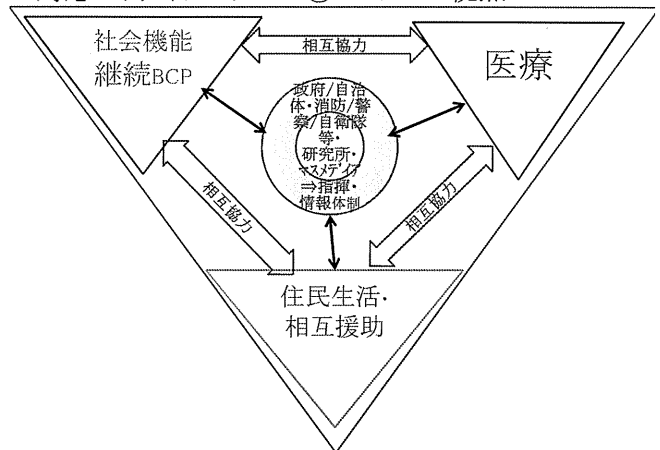
3. 一般人・学生・中小企業教育用資料
東京商工会議所中心に、協力して教育用パンフレットの作成等を行った。
本パンフレットは、平成20年度強毒型インフルエンザパンデミックを想定して作成したもの(第1版)の続編としての、弱毒型新型インフルエンザ用として、今回のパンデミック対応に沿ったものとした。

4. 公的機関等との机上シミュレーション
公的機関を想定した机上シミュレーションを行い、特に検疫所における平成21年度の実活動をベースに、これからの在り方、課題を抽出する形でのシミュレーションとした。

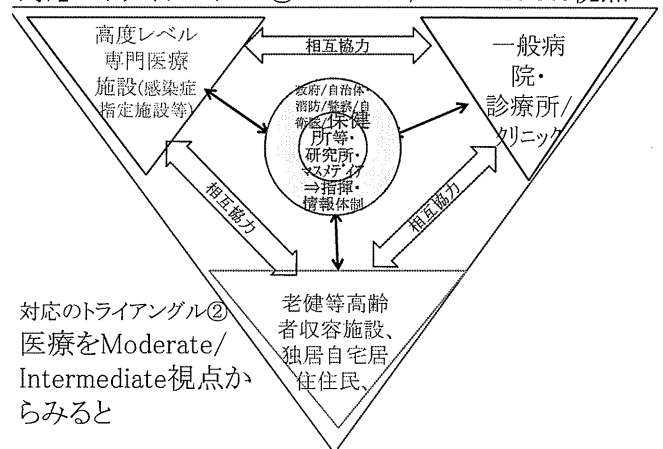
5. 対応の組み立てのシェーマ化
これまでの当班の活動、実際のパンデミックでの対策活動からのまとめとして、以下のシェーマをベースに、訓練を想定することの必要性が明らかとなったと考えられる。

我々が、「パンデミック対応のトライアングル」マクロ・インターミイデーテイト(中間)・マイクロと呼ぶものである。
その内の一部、医療面からの対応を提示する。

対応のトライアングル ① マクロの視点

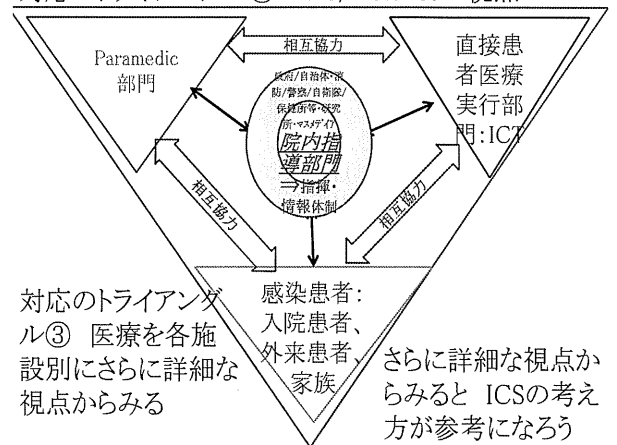


対応のトライアングル②Moderate/Intermediate視点



対応のトライアングル② 医療をModerate/Intermediate視点からみると

対応のトライアングル③Micro/Detailedの視点



対応のトライアングル③ 医療を各施設別にさらに詳細な視点からみると さらに詳細な視点からみると ICUの考え方が参考になるう

別紙3-2

E. 結論

平成20年度より開始していた本研究成果により平成21年4月より発生したH1N1 Pandemicにおいても、一部の施設では、落ち着いて対応できたとの意見もみられ、一定程度は、その意義があったと考えられた。

それらのデータも踏まえて、訓練の在り方の基本となるシエーマの作成も可能となり、また教育用資料も徐々に充実してきている。

個々の研究分担者の報告書からもその充実度が窺われると考えられる。

しかし、今回提示したマクロ・ミクロの視点に加えて、目を将来に向ける、すなわち強毒型のインフルエンザ亜型、その他のパンデミックの発生の可能性を想定すると、更に徹底した協力・共同作業の必要性がある。

そのための位置づけを確認したうえで、本研究の継続の必要性が明らかとなったと考えている。

F. 健康危険情報 特になし(分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表

1. 論文発表

・原口義座: 災害医学・医療における蘇生学の役割の検討。平成21年度佐賀大学GPシリーズ。45-64, 平成22年3月 佐賀大学, 2010

・原口義座: インフルエンザ・感染症を広く考える。新健康セミナー-高圧ガス 46(5): 370-371、2009

・原口義座 インフルエンザから、もう一度医療全体を見直してみよう 新健康セミナー 高圧ガス 46(8):662-663、2009

・原口義座 インフルエンザパンデミック対策 新健康セミナー 高圧ガス 46(6):52-56、2009

・原口義座 まだ続くインフルエンザパンデミック 新健康セミナー 高圧ガス 47(1): 50-52、2010

2. 学会発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

・Yoshikura Haraguchi, Hosei Nishi, Yozo Tomoyasu, Masami Hoshino, Shinji Hosotsubo, Kaori Hirago, Nathane L. Rohden: Medical Measurement against Flue Pandemic - from the viewpoint of "Disaster Medicine Compendium. International College of Surgeons(ICS) 2009, Beijing December 2 009

・原口義座: 災害医療と集中治療-インフルエンザパンデミックにおける他部門・医療連携の在り方に関する研究。第37回日本集中治療医学会 広島 2010 3月

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他

なお、本研究の遂行にあたっては、詳細なご報告をいただいた分担研究者の諸先生方に加えて、特に大日康史 国立感染症研究所主任研究員、角田隆文 都立荏原病院 部長、渡邊千之 自衛隊中央病院 病院長、には、各箇所毎にご指導・ご指摘をいただき、本研究報告誌の作成に至ったことを、再確認させていただくことと、シンポジウム等にご協力いただいた先生方に御礼申し上げます。

4. 平成 22 年度活動概要説明

●はじめに 研究主任者 原口義座

本研究の平成 22 年度の活動を中心に研究分担者のご研究も補足して、概要を報告する。
その経緯の説明に加えて、適宜「考え方等」を述べます。

[はじめのはじめに]

平成 23 年 3 月 11 日(金)に発生した東北沖大地震・東日本大震災は、いろいろな面から、わが国、世界的にも大きな傷跡を残しました。被災された広域の方々には、慰めの言葉をかけることも困難を感じるほど、私たちも心を痛めております。

その強い影響を、研究主任者としても、また研究分担者・協力者も活動に巻き込まれました。

更に、その後も現場での災害医療援助の活動に、かかわりあってきたこと、また本研究を今後の復興に活かしたい(特に厳冬をむかえるこれからを想定して)などの理由で、報告書の作成を見直したため、完成が遅れましたことを、深くお詫びいたします。

[詳細経緯]

本研究班としても、最後のまとめをかねた大々的な(?)雪中での訓練・研究会を、3月11日(金曜)に新潟県六日町市で、開催しておりました。

その真最中に大地震が発生しております。その際には、スカイプによる情報伝達訓練中でした。中途での中断となりました。

直後より、交通手段の障害も発生し、更に加えて、同日夜間(未明)にも、長野県北部・新潟県でも震度6弱～5強の地震が発生し、六日町市にも強く及んだことでもありました。

添付した動画とも関連しますが、記録を見て下さい。(24頁参照)

その後、研究分担者・班員・研究協力者は、当方も含めて、東北地方中心に災害復旧にあたっておりました。さて話を本論に戻します。

[研究概要から]

平成 22 年度の研究内容としては、前年度のインフルエンザパンデミック、これは幸いなことに弱毒ではありましたが、ここでの経験・反省をもとに、多面的に施行いたしました。大きく二つの面に分けられると思います。

一つには、具体的にどのようなことが有用か、ということをし、もう一つは、将来のパンデミックの発生を危惧して、これからをどうとらえるかという二つの面からのアプローチであります。

前者は、医療側としては、当然重要でもありますが、問題点としては、目先を重視した面が強いと見え、しばしば臨床部門が陥る自己満足のリスクがあります。

後者は、中・長期的にみる視点であります。

しばしば「それが、どう役立つのか、もっとすぐ役立つ内容でなければ・・・」というような、足を引っ張る、知的レベルが低い発言がよくなされてきていることは、問題だろうと思っております。

今回の大震災でも疑問が提示知れている「日本 DMAT」の活動方針などからは「目先の功を焦る・・・」様な印象を強く受けております。

当方としては、リスク管理の重要性を含めて、広い視野、長期間での視点、多面的な対応方針を重視して研究を進めたつもりです。

「日本 DMAT」への疑問も含めて、平成 23 年 8 月に日本腹部救急医学会での発表内容も加えて添付したいと思えます（付録その⑤，P183～184）。

すなわち、今回の報告書でも、両面から扱っていただいたつもりです。

なお、本研究は、わが国・世界へのパンデミックの悪影響を減ずる目的の研究であり、地球レベルでの悪影響拡大・悪循環形成のリスクを危惧しております。それゆえ、そのような大きな視点からの要素を無視して進めるべきでないと考えております。

以上の観点から、本総括研究報告書としては、多面的に関連する研究成果を研究分担者も含めてお願いしたこととなりました。

最後に付録としていくつかつけました。目次を参照してください。

更に、総合研究報告書（平成 20 年度～22 年度）には、関連する問題として、若干本研究の主題からは外れますが、避けるべきでない考え方として、

①「地球レベルの悪循環のリスクをどうとらえるか」を東日本大震災を中心に提示した資料（「高圧ガス」に当方が、投稿したもの）。

②当方が、以前申請しておりましたが、却下された、「原子力災害医療対応をテーマとした原子力研究」の資料：これはヒアリングで、審査委員長から明確に「そんな、原子力（大）災害を取り扱う研究は考える必要ない」という趣旨の発言をされたものですが、いわゆる「安全神話」にもつながる課題です。

この資料等も、総合研究報告書の付録として添付するつもりであることを付記します。

なお、多くの研究協力者にもお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

(1)総括研究報告書 新型インフルエンザの大流行に備えた訓練に関する研究(20291101) 原口義座

別紙 3

研究報告書
厚生労働科学研究費補助金（新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業）
総括研究報告書
新型インフルエンザの大流行に備えた訓練に関する研究（20291101）

研究主任者 原口 義座

研究要旨 新型インフルエンザパンデミックを想定し多職種・多分野の対応のあり方の洗い出しを目的とし、幅広い視点から多数の実動訓練と机上訓練総合訓練を行うことにより、問題を洗い出し、訓練のあり方を研究した。

その新しい試みを含む多くの知見が得られたが、特に東日本大震災での被災からみて本年冬季のパンデミックの発生も視野にいれて、トリアージを含めて、トリアージタグ(案)を作るなども行った。

| | |
|---------------------|------------------------|
| 研究分担者氏名・所属研究機関名職名 等 | |
| 原口義座 国立病院機構災害医療センター | 大日康史 国立感染症研究所感染症情報センター |
| 川田諭一古河保健所 保健所長、 | 山本保博 東京臨海病院 院長 |
| 友保洋三 白鬚橋病院リハビリセンター長 | 角田隆文 都立荏原病院感染症科科长 |
| 星野正巳 至聖病院救急部部长 | 白井淳資 東京農工大学 農学部獣医学科教授 |
| 渡邊千之 元自衛隊中央病院院長 | 竹田 努 宇都宮大学 |
| 横田裕行 日本医科大学大学院 | 酒井基広 東京女子医科大学臨床工学部 |
| 陰下敏昭 陰下内科 | 津端 徹 京葉病院院長 |
| 加藤隆弘 江戸川病院副院長 | 星野恵美子 社会保険船橋中央病院副院長 |

| | |
|---|---|
| <p>A. 研究目的 新型インフルエンザを代表的疾患とするパンデミック対策、および関連するバイオテロ、更にNBC災害も視野に入れた医療対応として、各々の専門性と並行し全体を統合・総括する。このための技術的側面の解決に加え、総合的視点から指導できるシステムを確立することを目的とした。</p> <p>B. 研究方法 実際の経験、資料収集、机上訓練、実動訓練による教育用基礎資料の作成へ向けて。</p> <p>C. 研究結果 ○基本的なデータ収集を行った。 ○多面的な視点からの訓練、更にベースとなる基礎的な訓練としての活動。</p> | <p>○各種の多様性を加味した訓練用のシナリオの原版の作成へ向けての動画記録作成等</p> <p>○ 訓練用シナリオを多面的に作成し、特に独居老人・災害弱者、企業内患者発生、ドライブスルー方式等も考慮した上で、実用性のあるインフルエンザパンデミック用のトリアージタグ等の作成を試みた(試案作成)。</p> <p>D. 考察 以上の研究の結果、各分野別、特に職種面・一般企業における認識の向上へ向けての資料が作成段階となった。 パンデミック予防・感染防止・防護面にも有用な資料である。</p> |
|---|---|

| | |
|--|--|
| <p>すなわち、課題解決も含めて、上記の研究結果をまとめた形で、記録集/印刷物と動画（訓練）記録として、作成した。</p> <p>今後を考えると、明らかとなった各々の課題への実対策が急務であるが、特に動画を含む記録上にその対策を提示しつつあり、広く情報伝達することが可能となれば、今後のパンデミックに対して、各施設ごとにより被害を軽減する方向への準備を進めることができるといえる。</p> <p>E. 結論</p> <p>新型インフルエンザパンデミック対策のみならず、関連するバイオテロ、NBC災害まで広げられる柔軟な応用力のある体制が必要である。</p> <p>そのために役立つと考えられる幾つもの改善点、方策が提案され、配布資料として、動画を含めて、作成した。</p> <p>更に、これまでに作成した多数の参考資料を有し、これらは、平成20年～22年の総合報告書に記載することとしている。</p> | <p>F. 健康危険情報</p> <p>G. 研究発表</p> <p>1. 論文発表</p> <p>①原口義座, 他:特集 新型インフルエンザパンデミックを経験して一課題とこれからの対策一(I)序。 医学と薬学 2010;63(6):839-843</p> <p>②原口義座, 他:特集 新型インフルエンザパンデミックを経験して一課題とこれからの対策一(II)新型インフルエンザパンデミックを振り返ってこれからの展望する。 医学と薬学 2010;64(1):42-48</p> <p>2. 学会発表</p> <p>H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)</p> <p>1. 特許取得</p> <p>2. 実用新案登録</p> <p>3. その他</p> |
|--|--|

● 施行研究概要・経時的報告(逆順)

原口義座

経時的に主な活動結果を提示します。

新しい年月日から逆に 日時をさかのぼって 提示します。

主要なものは、太字・アンダーライン、直接強くは関連しない項目、研究期間(平成22年度)を外れる内容は、斜線で提示しました。

平成23年度

7月 福島原発事故拡大・東日本大震災～慢性期へ、感染症拡大危惧

5月 放射線被ばくと医療を学ぶ会セミナー:東京,代表世話人:原口義座

4月 福島原発事故拡大・東日本大震災～亜急性期～感染症拡大危惧感
(現地での災害医療)

平成23年

3月19日(土)-22日(火)茨城・福島方面医療援助(原口義座、友保洋三, 他)

3月10(木)-12(金)六日町市・最終訓練・講習会(準備・まとめを含めて)

11日(金)実践訓練施行(六日町市・複数個所で)・東北沖大地震・津波発生

平成22年

12月末 豪州、西オーストラリア州でのパンデミックへの現状視察

12月17日(金) 実践訓練・研修:関西国際空港にて、機中等

11月18日(木) WHO事務局長Margaret Chan(写真)

日本来日, 講演会(東京女子医科大学)



11月11日(木) 実践訓練:京王鉄道教習所にて

9月 パプアニューギニアにおける対策の視察・大使館

8月23日(月) 実践首長会 東京

8月2~3日(月・火) 研究班訓練打合せ 新潟県長岡市

7月27日(火) 東成田駅・京成電鉄、成田国際空港駅等にて実践訓練施行

5月21-23日(金-日) 首長連携交流会 東京

5月16日(日) 集客機関・施設でのあり方の検討(Disney Land, 浦安市)

平成22年

1月26日(火) 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業研究発表会

「新型インフルエンザの大流行に備えた訓練に関する研究」国立感染症研究所

1月22日(金)英国大使館でのバイオ災害セミナー

なお、これは、ごくごく限定した研究主任者にほぼ限定したのみの活動記録であり、各研究分担者は、別個にも活動をしていただいておりますので、ここには加えてないところも多々あります。

ご協力・ご指導をいただいた、全ての研究分担者の先生方に深謝いたします。

また危機管理機構の研究協力者、ノルメカエイシャ、KDDI、他の多くの企業の方々の協力にも御礼申し上げます。

5. 各活動毎の意義付け、意味、特徴等の説明

1) 各論としての説明

実際の活動を含めて、これまでの総括報告書およびパート I の 1. 2. 3. で示したごとく本研究班の活動結果からの捕らえ方を補足・解説する。詳細は、上記の報告書を参照してください。

通常多くの報告書では、総論から入り、各論としての説明に進むことが多いが、今回は、各論から始めさせていただく。その理由は、基本的には、経験論的な考え方、すなわち帰納法的な視点から取り組ませていただいたからである。

ここでの、検討結果を踏まえて、総論的な考え方・これからの活動の方向性へ進める。

具体的な、解説対象とした研究項目としては、大きく分けると、実活動（2009年からのパンデミックでの）からの視点からみた研究内容と、パンデミック以前から、更には以後にかけての研究内容に分けられる。

なお、多くの項目があげられるが、紙面・時間の関係で、ここで扱った項目は、以下である。説明報告する。

- ・成田空港での活動用書類の提示：
- ・実際のパンデミックでの医療活動からみて
- ・パンデミックにおけるトリアージタッグの案・一例（添付）
- ・ドライブスルーの試み
- ・検疫活動の位置づけ
- ・成田空港での活動用書類からみて

平成 21 年での弱毒型インフルエンザパンデミックにおいては、国際空港での国外からの入国者への検疫業務がかなり積極的になされた。研究主任者も、研究分担者（の一部）も加わってきた。ここでは、検疫をどうとらえるか、評価の問題も残されている。当方の意見も含めて提示する。

(1) 資料関係の提示

その①：健康状態質問票（平成 21 年春の段階、以降の修正等は不明）（添付）

その②：新型インフルエンザの検査の流れ（機内検疫）09/05/06(2 稿) 及びブース検疫対応マニュアル（2009/05/06 Ver3.30）（添付） 今回の検疫で明らかとなった如く（既に十分想定されていたことでもあるが）、検疫で十分に防護できないことは当然である。

その③：現場での写真記録等

(2) 考え方と結論

検疫を全面否定する考え、十分な効果を期待する意見、その中間の意見等いろいろ見られることも当然である。現時点での評価をどうとらえるかは、今後の検疫業務のみならず、感染症をどうとらえるかによって、決定すべきである。今回の弱毒型インフルエンザでは、防護は不十分であった理由を多面的に考えるべきであろう。まず、第 1 は、交通手段の進歩が感染症に対して（検疫所の業務も含めて）弱くなっていることは確かである。第 2 点は、情報収集システムの問題があるであろう。特に海外における発生に対して、十分な情報が得られていたかどうか、問題が残りそうである。

第 3 点は、チェックシステムの問題である。各種の感染症に対する診断・病原体の探知システムは、主に医学的・科学的側面が強いが、やはり軽視すべきではないであろう。

第 4 は、対応体制に関して、力を入れる場所・程度の優先順位等を俯瞰的に見直す必要がある。これは、経済的な負担も含めて、あるいは人的負担、さらには、国際的ネットワークの確立など、幅広い視点で考えるべきである。

最後のまとめとして重要な観点は、一般住民・行政・企業（特に医療、ライフライン関係企業）との相互理解・

literacy (災害に関しても、医療に関しても含まれるし、その前提として、信頼感・情報隠匿等がないこと、経済的・新自由主義的視点が強すぎると、前提が崩れる可能性が高い)も重視すべきである。そのためには、検疫業務は、有用性も指摘できるであろうと考えている。

以上から、当方の結論としては「情報収集地点と一般社会の理解・協力を得るため」に一定程度の「検疫業務」は有用であろうと思われる。

いずれにしても、これからの強毒型の (H5N1 も含めて) インフルエンザパンデミック対策を考えると、さらには、その他の感染症 (ウエストナイル熱も含めて) も、あるいは、自然発生以上に対応に困る可能性も高い、バイオテロの可能性も考えると、総合的な視点からの対策、また原因となる病原体をしっかりと見据えて、考えることを続けるべきであろう。今回の検疫業務での経済的損失問題を声高く非難する意見もみられる。それにも一理あると思うが、それ以上に、パンデミックで (あるいは東日本大震災を持ち出すことは少し話がずれるが) 莫大な損害が発生したであろうことを考えると、一定程度の損失は、(他山の石という言葉は、余り適当でないかもしれないが)、寛容に考え、もっと大きな見方で、組み立てるべきであろうと考えている。

その意味では、あくまでも個人的意見ではあるが、日本 DMAT の東日本大震災での問題点が基本的に・本質的に不適切な面がある (附録に問題点を提示している。参照のこと) こととは、比較できない程度 (軽いものであろう) と考えている。

- ・医学と薬学 特集号:新型インフルエンザパンデミックを経験して—課題とこれからの対策—(I) 及び(II)
Vol.63 No.6, Jun.2010 and Vol.64 No.1 July.2010 表紙のみ (添付)

当方が、担当したものとして、幅広く、医療でも可能な範囲で多分野から記載を尾根以外したものである。

- ・Draft: WCDEM – Crisis Standards of Care (TMW v.1) : Workshop Summary (添付)

解説 北京での WCDEM: World Congress of Disaster and Emergency Medicine, May to June, 2011, Beijing のワークショップでのシンポジウムのサマリーである。著者は、主に原発災害と地球問題、医療倫理・哲学を発表させていただいたが (主催者の依頼もあり)、同時に WHO としての立場などから Flu pandemic も重要な検討課題となった。まだ修正版の出される可能性も高いが、考え方も含めて、意味があると思われるので、ここに提示する。

・トリアージタッグの一例 (添付)

本トリアージタッグは、米国 Albany での 1998 年 9 月研修・訓練の際に提示されたものである。基本的には START 方式であり (その元祖?に近いと思われるが)、特に重要と私たちが評価していることは、トリアージレベル判定のみならず (同列の重要なレベルとして) contamination の有無を加えていることである。当方は、1996 年より NBC 災害医療に携わっていることもあり、この面を極めて高く評価させていただいて、直後より、研修等において、提示させていただいている。

その面も加味して、インフルエンザパンデミック用のトリアージタッグ (添付) 作成時には参考にさせていただいたものである (添付)。S

- ・原口義座活動: 2007 年～ 2008 年 7 月迄の活動全般 (抜粋) (添付)

引用文献 (と説明、あるいは内容も採用) 及び 添付資料

- ・原口義座、山本保博、他: 危機一髪! SOS もし日本に天然痘ウイルスがばらまかれたら・・・
フジテレビ放映 (平成 15 年 5 月 26 日 19:00～) 動画記録 (全 19 分)

(興味をお持ちでしたら配布可能)

- ・原口義座、友保洋三、西 法正 (監編集): NBC 実戦! NBC 災害・テロ対策における医療救護活動訓練レポート (全 3 巻)

第 1 巻 N (核物質) 災害 (原子力災害) 編 全 54 分

第 2 巻 B (生物剤・生物毒) 災害編 全 67 分

第 3 巻 C (化学剤・中毒剤) 災害編 全 39 分

2008 (本研究の一部は平成 19 年度国立病院機構共同研究費による) (興味をお持ちでしたら配布可能)

- DVATEX Program(Navy Medicine Office of Homeland Security): Disaster preparedness, vulnerability analysis, training and exercise program(DVATEX). Understanding Chemical, Biological, Nuclear and Explosives(CBRNE) incident response. Training 10-13 February 2004, Yokosuka, US Navy Hospital, (米軍横須賀基地内の病院にて行われたNBC訓練である。プログラム (slide と和訳) を添付する。基本的姿勢としては、大変参考になると考えられる。)
- 原口義座、友保洋三、西 法正 (編集): 医療施設におけるSARS患者緊急医療対応の具体的なあり方報告・検討集 緊急報告書 医療施設における図面に基づく具体的対応のありかたを中心に 平成15年11月～12月作成分 厚生労働科学研究 (医療技術評価総合研究事業) 核・生物・化学物質毒災害及び関連する災害 (NBC災害) に対する総合的医療対応の研究—多面的な対応体制の確立を目指して—。暫定版、平成15年12月14日、第2版:平成16年2月10日、(興味をお持ちでしたら配布可能)
- 賀来満夫: 大規模感染症について。スライド説明。 原口義座、友保洋三、西 法正 (編集) 医療施設におけるSARS患者緊急医療対応の具体的なあり方報告・検討集 緊急報告書 (同上) 別冊。(興味をお持ちでしたら配布可能)
- 原口義座: 腹部救急疾患とリスクマネジメント: 災害医療を中心に。新型インフルエンザの大流行に備えた訓練に関する研究 (H20-新興-一般-008) 平成22年度総括研究報告書 183-184, 2011, (「第47回日本腹部救急医学会総会 平成23年8月博多 よりの抜粋」)
(本報告書には、非抜粋内容を掲載する)
- 原口義座: 広域医療対応体制の確立による大規模各災害時における安全レベル向上に関する研究—多数傷病者発生時の被害軽減・住民安心対策を含めた三次元的対応の研究。原子力科学研究申請 ヒアリング 平成16年5月17日、東京 平成17年度分 (不採用分)

本研究の趣旨は、住民への安心・安全を確立することも重視した対策の研究である。

もちろん、もし採用されたとしても、今回の東日本大震災における原発災害や昨年までの我が国のインフルエンザパンデミックへの応用において、どれだけ有効であったかを推定・判定することは基本的に容易ではないとしても、かなり有用であった可能性があったのではと考えている。ヒアリングの時点では、いわゆる「安全神話」にもつながると考えられるが、検討対象外であるというような趣旨の比較的断定的ともいえる発言が、ヒアリングの責任者よりなされたと記憶しており、少なくともその時点での、危機感の欠如は明らかであったと思っております。もっとも当方としても、力不足、その後も含めて努力が足らなかったともいえることも確かでしょうが (抜粋を掲載する)。

添付資料

- 石塚哲朗: 感染症法等の指定等の特例について。2008年12月19日 Keio G-SEC 第5回WS配布資料。
- 第15回放射線事故医療研究会抄録集より抜粋 (平成23年8月27日 埼玉県和光市) (添付)
- 新型インフルエンザ (A/H1N19) における重症患者の治療に関する研修会より (2009年10月17日 東京)
本報告は、実際の医療活動を特にしっかりと評価・発表したものであり、学問的にも有用性は高いと考え、紹介させていただくこととした (添付)。

2) 総論としての考え方

今後をどう捉えるべきか：幾つかの視点を考える。

以下が考えられるが、基本的にこれらに関しては、全てを網羅することは困難であるが、その一部をパートⅡ、パートⅢで取り扱うこととした。

①原因となる病原体から

(1) フルーに関して、：今後を考える

(2) 他の病原体との関連から、：

- ・パンデミック・アウトブレイク、
- ・新型感染症、
- ・耐性菌の問題等、
- ・複数同時感染症アウトブレイク

(3) バイオテロとの関係から、

- ・バイオテロ対象病原体
- ・他のテロとの関係、同時多発テロを含めて
- ・複数種類のテロの可能性

(4) その他

②対応レベルを向上するための訓練・方法論の面から

- ・方法論、その他の改善面から
- ・災害弱者への準備態勢の問題
- ・社会的不安の軽減・風評被害 / demagoguery・流言飛語対応

③背景となる姿勢・考え方・知識集積・社会体制等から

- ・哲学・姿勢面
- ・経済的側面
- ・世界レベル悪循環の遮断：メガ災害、catastrophe 対策
- ・過去の対応の冷静な見直し・日本 DMAT の問題点
- ・習慣・慣習・社会体制
- ・その他

パート II

パート I の密接関連領域， バイオテロを含む生物毒災害

パート II は，パート I の密接関連領域として，
バイオテロを含む生物毒災害に関する研究活動・研究成果全般を扱っている。

パートⅡのはじめに

インフルエンザパンデミック及びそれ以外の生物毒災害の観点から考える

ここでは、パンデミックを幅広くとらえて、インフルエンザパンデミックでの研究成果につなげる内容とした。感染症関連の項目を一部提示する。

前に示した如く、鳥インフルエンザにおいても、globalには、常にテロの懸念を念頭において対応を考えている。それゆえ、その他の感染症を含めて、幅広く研究対象とすることは、本研究の責務とも考えている。その一つは、バイオテロに関してである。すなわち、今回の研究に強く関連するものとして、バイオテロの問題がある。実際米国911の後に、炭疽菌テロがなされたのみでなく、そのリスクは、強く認識されるべきである。また、災害弱者問題も関連項目と考えており、パートⅢで扱う。以下の項目を中心に提示する。

1. インフルエンザ

2. SARS等に関して

本項は、国立病院機構チームを対象とした研修会（担当責任者、原口義座、友保洋三、指導、賀来満夫・西法正）での結果である。インフルエンザパンデミックにおいても、参考になる面が多く、本研究班としての活動に加えさせていただくこととした。

(1)SARSに関して

(2)ニパウイルスに関して

3. バイオテロに関して

(1) バイオテロのとらえ方

これからを考える上で、避けて通れない項目と考えている。本報告書の読者にも参考になると考えている。

(2)DVATEX

米国の、パンデミック対策チームの紹介。

当院訪問時の写真と横須賀米軍基地での訓練（机上シミュレーション・バイオテロがテーマ）における資料（の一部）を示す。インフルエンザパンデミックにも対応しており、本研究班としての、米国視察においても、関連している専門医（Professor Weiss R）との意見交換を行った。その件に関しては、平成20年度報告書を参照してください。

(3) G7+Global Health Security Action Group

化学テロを主な対象とした研究グループで、当方が chief organizer として開催したものも含まれる。（November 7-8, 2008 国立病院東京災害医療センターにて）

(3-1) 生物テロ

(3-1) 科学テロ

4. その他の生物毒災害への考え方

5. NBC

今回は提示しておりませんが、このほか、多くの関連する動画資料もあります。

ご興味をお持ちの方々には、ご紹介できるかと思います。

1. インフルエンザ

Part II -1 その他のflu pandemicへの取組のデータ報告

Japan-WHO Joint Meeting on Early Response to Potential Influenza Pandemic in Asia, January 2006

【会議の日程 (予定)】

1月12日(木)

| 時間 | 内容 | 取材可否 |
|-------------|---|------|
| 9:00-9:30 | 開会 外務省金田副大臣 挨拶 厚生労働省西川大臣政務官 挨拶 尾身 WHO 西太平洋地域事務局長 挨拶 | ○ |
| 9:30-9:40 | 写真撮影 | ○ |
| 10:00-12:00 | セッション1 General overview presentations ・ 鳥・新型インフルエンザの脅威 (WHO) ・ 新型インフルエンザ発生時の早期対応の概要と問題点 (WHO) | ○ |
| 13:30-15:00 | セッション2 Country presentations 感染国より早期対応策についての報告 | × |
| 15:30-17:00 | Round table discussion アジアにおける早期封じ込めについての討議 | × |
| 17:15-17:45 | 記者ブリーフ (外務省中央庁舎7階北大会議室(760号室)、日英同時通訳あり) | |

1月13日(金)

| 時間 | 内容 | 取材可否 |
|-------------|--|------|
| 8:30-9:15 | セッション3 Donor presentations 日本、米等からのプレゼンテーション | ○ |
| 9:15-9:30 | グループディスカッションについての説明 | × |
| 9:30-11:00 | グループディスカッション ・ 早期発見と情報共有 ・ 国レベルの早期対応の課題 ・ 国際・地域メカニズムの検証 | × |
| 11:00-12:00 | グループごとの発表 | × |
| 14:00-15:00 | 結論と提言 | × |
| 15:00-15:30 | 閉会 | × |
| 16:30-17:00 | 共同議長記者会見 (外務省中央庁舎7階北大会議室(760号室)、日英同時通訳あり) | |